
学校適応と将来展望が「勉強好き」の変化に与える影響

—— 初期値モデルと連動モデルの比較検討 ——

橋本 尚美 邵 勤風 須藤 康介

抄録

本稿の目的は、中学生・高校生を追跡したパネルデータの分析を通して、学校適応と将来展望が「勉強好き」の変化に与える影響を明らかにすることである。その際、入学時点などの初期状態の学校適応や将来展望が低かったことで勉強好きでなくなっていくという初期値モデルと、在学中の学校適応や将来展望の低下に連動して勉強好きでなくなっていくという連動モデルの分析を行い、両者の説明力を比較検討する。

分析に使用するデータは、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学び」研究プロジェクトが実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2017」(JLSCP2015-2017)である。分析対象は中学1年生から高校3年生である。

分析の結果、得られた知見は3つである。第1に、どの学年でも、勉強が「好き」から「好きではない」に変化する子どもが一定数おり、勉強が「好き」をキープする子どもは、特に高校生では少なくなる。第2に、勉強好きの変化は、学校適応や将来展望の初期値で決まる部分と、連動して変化する部分がある。つまり、初期状態の意識が重要であると同時に、初期に課題を抱えていたとしても、在学中に学校適応や将来展望を変化させることによって勉強好きを変化させられる可能性がある。第3に、勉強好きの変化には、学校適応と将来展望の両方の要素が独自の効果を持っており、それぞれを高めるような働きかけが重要となる。

キーワード

勉強好き、学校適応、将来展望、初期値モデル、連動モデル

1. 問題設定

本稿の目的は、中学生・高校生を追跡したパネルデータの分析を通して、学校適応と将来展望が「勉強好き」の変化に与える影響を明らかにすることである。

勉強が好きであることは、子どもが学びに向かううえで重要な要素である。学習動機づけの研究によれば、他に何か目的があつて勉強するのではなく、楽しいから・おもしろいから、あるいは好きだから勉強するという内発的動機づけは、学習動機づけのなかで最も自律的・意欲的であり、子どもが学習に価値を見いだしている状態であるとされている(櫻井2009、鹿毛2013)。

しかし、これまでさまざまな調査で、日本の子どもたちは、小学校から中学校・高校へと学校段階が上がるにつれて、「勉強が楽しい」と感じる比率が減少することが明らかになっている⁽¹⁾。そして、そのような現状をふまえ、学習意欲の規定要因に関する研究が数多くなされてきた。たとえば、出身階層や高校ランクに着目するもの(荻谷2001、荒牧2002)、地位達成や自己実現などの価値志向に着目するもの(荒牧2002)、子ども自身の動機づけスタイルや学習方法に着目するもの(岡田・中谷2006、伊藤編2010)、教師の授業実践や教室での友人関係に着目するもの(伊藤編2010)、親やおとなからの働きかけに着目するもの(速水1998、伊藤2011)などが挙げられる。しかし、これらは単年度調査を用いた研究であり、学習意欲が高まる(あるいは低くなる)過程は検討されていない。子どもたちはどのように勉強が好きでなくなるのか、また、何かのきっかけがあれば勉強が好きになるのか、それらを明らかにすることが求められる。

本稿では、学習意欲の規定要因のうち、学校適応(授業適応・学級適応など)と将来展望(進路希望・将来目標など)に着目し、それらによって勉強好きがどのように変化するかを追究する。その際に参考にしたのが、学習レリバンスに関する議論である。子どもの学習への意義づけは学習レリバンスと呼ばれ、現在のレリバンスと将来的レリバンスに区別される。そして、将来勉強が役立つという将来的レリバンスだけでなく、学校の授業がおもしろいなどの現在のレリバンスを持っていることが、学業達成に効果を持ち、生涯学習も促進することが示されている(本田2004)。本稿では、現在のレリバンスに関連する要素として学校適応を、将来的レリバンスに関連する要素として将来展望を取り上げた。

ただし、本研究で明らかにしたいのは、単に学校適応や将来展望と勉強好きが相関しているということではない。それらの間に相関があること自体は、むしろ自明である。本研究で検証するのは、学校適応や将来展望が勉強好きの「変化」にどうかかわっているかである。たとえば、中1から中2にかけて勉強好きの子どもが減少することに対して、中1時に学校適応や将来展望が低かったことで、その後に勉強好きでなくなっていくという説明(初期値モデル)と、中1から中2にかけての学校適応や将来展望の低下に連動して、勉強好きでなくなっていくという説明(連動モデル)のどちらが妥当なのか。この点を明らかにすることで、子どもの勉強好きの変化をダイナミックに捉えることができるはずである。仮に初期値モデルが支持されれば、中学校入学前あるいは入学時の意識づけがより重要ということになるし、連動モデルが支持されれば、中学校生活のなかで意識を変えていく働きかけがより重要ということになるだろう。

2. 使用データと分析枠組み

分析に使用するデータは、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学び」研究プロジェクトが実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-

2017」(JLSCP2015-2017)である。本調査は、日本全国の小学1年生から高校3年生の親子を対象に、同一個人を追跡したパネル調査である。対象者は、株式会社ベネッセコーポレーションが保有する親子リストを利用して募集した調査モニターである⁽²⁾。調査時期は、2015・2016・2017年の主に7～8月である。

本稿における分析対象は、2015・2016年パネルデータ、および2016・2017年パネルデータにおいて、中1→中2、中2→中3、高1→高2、高2→高3と移行したサンプルとする。学校段階をまたぐと各変数の変化を解釈することが困難になるため、中3→高1のサンプルは、分析に用いない。また、勉強好きが少なくなるのは主に中学校・高校段階であり、さらに、進学に関する変数は中学生・高校生にしか調査していないことから、小学生は扱わないものとする。分析サンプルの構成は表1ようになる。

表1 分析サンプルの構成

	中1→中2	中2→中3	中3→高1	高1→高2	高2→高3
2015・2016年パネルデータ	1127	1153	1075	985	1021
2016・2017年パネルデータ	989	1061	1003	966	881
分析サンプル(合計)	2116	2214	×	1951	1902

パネルデータのサンプルサイズは、両年度に親子ともに回答が得られたサンプルの数を表す。

分析枠組みは以下の通りである。まず、各年調査において、「勉強が好き」(「あなたは勉強がどれくらい好きですか」という意識を尋ねているため、その変化を従属変数として設定する。その際、勉強が「好き」から「好きではない」への変化と、勉強が「好きではない」から「好き」への変化では、その規定要因が異なると想定し、両者をそれぞれ従属変数として設定する。なお、便宜的に、たとえば中1→中2サンプルにおいては、中1時点を「前年」、中2時点を「今年」と表記することがある。

独立変数は、3つの要素から構成する。属性、学校適応(授業適応・学級適応など)、将来展望(進路希望・将来目標など)である。属性はコントロール変数である。前述のように、学校適応と将来展望については、初期値モデル(前年の状態を独立変数として投入)と連動モデル(前年から今年にかけての変化を独立変数として投入)の分析を行い、どちらのモデルがより説明力が高いかを検討する。

3. 使用する変数

(1) 従属変数の経年変化

表2は、従属変数である「勉強が好き」の経年変化を示したものである。「あなたは勉強がどれくらい好きですか」という設問に対して、「とても好き」「まあ好き」に回答した場合を「好き」、「あまり好きではない」「まったく好きではない」に回答した場合を「好きではない」としている。

これをみると、中1から中2、高1から高2にかけて、「好きではない」の比率が統計的に有意に増加している。特に中1から中2にかけては、「好き」から「好きではない」に変化した人が18.2%であるのに対して、「好きではない」から「好き」に変化した人は6.6%しか

表2 「勉強が好き」の経年変化

			今年 勉強が好き		合計				
			好き	好きではない					
中1 →中2	前年 勉強が好き	好き	度数	694	366	1060	}	勉強が「好き」 グループ	
			パーセント	34.6%	18.2%	52.8%			
		好きではない	度数	133	815	948	}	勉強が「好きではない」 グループ	
			パーセント	6.6%	40.6%	47.2%			
	合計		度数	827	1181	2008			
			パーセント	41.2%	58.8%	100.0%			
マクネマー検定			p=0.000						
中2 →中3	前年 勉強が好き	好き	度数	638	261	899	}	勉強が「好き」 グループ	
			パーセント	30.2%	12.4%	42.6%			
		好きではない	度数	252	960	1212	}	勉強が「好きではない」 グループ	
			パーセント	11.9%	45.5%	57.4%			
	合計		度数	890	1221	2111			
			パーセント	42.2%	57.8%	100.0%			
マクネマー検定			p=0.724						
高1 →高2	前年 勉強が好き	好き	度数	518	237	755	}	勉強が「好き」 グループ	
			パーセント	27.1%	12.4%	39.4%			
		好きではない	度数	175	984	1159	}	勉強が「好きではない」 グループ	
			パーセント	9.1%	51.4%	60.6%			
	合計		度数	693	1221	1914			
			パーセント	36.2%	63.8%	100.0%			
マクネマー検定			p=0.003						
高2 →高3	前年 勉強が好き	好き	度数	556	156	712	}	勉強が「好き」 グループ	
			パーセント	29.9%	8.4%	38.3%			
		好きではない	度数	250	895	1145	}	勉強が「好きではない」 グループ	
			パーセント	13.5%	48.2%	61.7%			
	合計		度数	806	1051	1857			
			パーセント	43.4%	56.6%	100.0%			
マクネマー検定			p=0.000						

いない。また、高校生は、高1から高2にかけて「好きではない」が微増（12.4%>9.1%）するものの、高2から高3にかけては「好き」が微増（8.4%<13.5%）し、ほぼ打ち消し合っていることがわかる。また、変化がなかった人に注目すると、「好き」をキープしている人は、どの学年においても3割程度にすぎない。一方、「好きではない」ままの人は、中学生で4割程度、高校生で5割程度存在する。

次節では、前年の回答に基づき、勉強が「好き」グループと、「好きではない」グループに分けて分析を行う。

(2) 変数の設定と記述統計量

表3は分析で使用する変数の設定、表4は独立変数の記述統計量である。「初期値」と書かれているものは、初期値モデルの分析で用いる独立変数であり、「変化」と書かれているものは、連動モデルの分析で用いる独立変数である。

学校適応に関する変数は、「授業が楽しい」、「尊敬できる先生がいる」、「自分のクラスが好きだ」の3つである。これらは子どもが安心して学べる環境や、学びへの欲求を刺激

する情報、学ぶことがおもしろいといった経験をもたらし、子どもを勉強好きに変化させる可能性があると考え、設定した。将来展望に関する変数は、大学進学を希望している、「入るのが難しいと言われる高校／大学に入りたい」、「将来の目標がはっきりしている」の3つである。これらは自分が将来どうなりたいかという目標の設定にかかわるもので、こうした目標を持つことが、現在の勉強に価値を見いだすことにつながり、子どもを勉強好きに変化させる可能性があると考え、設定した。

表3 変数の設定

		設定方法	
従属変数	「勉強が好き」の変化	「勉強が好き」について、「とても好き」「まあ好き」「好き」「あまり好きではない」「まったく好きではない」=「好きではない」としたうえで、前年回答が「好き」の場合を「好き」グループとし、今年「好きではない」=1、今年「好き」=0とした。また、前年回答が「好きではない」の場合を「好きではない」グループとし、今年「好き」=1、今年「好きではない」=0とした。	
属性	女子ダミー	女子=1、男子=0	
	国私立学校ダミー	前年に国立・私立学校に在籍していた=1、それ以外=0	
	成績	国語・数学・理科・社会・英語それぞれについて、前年の学年のなかでの成績を5段階で自己評価してもらい、回答を平均した。	
	母親教育年数	母親の最終学歴を教育年数に換算した。無回答には平均値を代入。	
	父親教育年数	父親の最終学歴を教育年数に換算した。無回答には平均値を代入。	
学校適応	「授業が楽しい」	初期値	前年の「授業が楽しい」について、「とてもあてはまる」=4、「まああてはまる」=3、「あまりあてはまらない」=2、「まったくあてはまらない」=1とした。
		変化	今年も上記と同様に変換したうえで、今年回答から前年回答を減算した。
	「尊敬できる先生がいる」	初期値	前年の「尊敬できる先生がいる」について、「とてもあてはまる」=4、「まああてはまる」=3、「あまりあてはまらない」=2、「まったくあてはまらない」=1とした。
		変化	今年も上記と同様に変換したうえで、今年回答から前年回答を減算した。
	「自分のクラスが好きだ」	初期値	前年の「自分のクラスが好きだ」について、「とてもあてはまる」=4、「まああてはまる」=3、「あまりあてはまらない」=2、「まったくあてはまらない」=1とした。
		変化	今年も上記と同様に変換したうえで、今年回答から前年回答を減算した。
独立変数	四大以上希望ダミー	初期値	前年の「将来どの学校まで進みたいか」について、「大学(四年制、六年制)まで」「大学院まで」=1、「中学校まで」「高校まで」「高等専門学校まで」「専門学校・各種学校まで」「短期大学まで」「その他」「まだ決めていない」=0とした。
		変化	今年も上記と同様に変換したうえで、前年回答=0、今年回答=1の場合を1、それ以外を0とした。
	四大以上非希望に変化ダミー	初期値	前年の「入るのが難しいと言われる高校／大学に入りたい」について、「とてもあてはまる」=4、「まああてはまる」=3、「あまりあてはまらない」=2、「まったくあてはまらない」=1とした。(中学生には「高校」、高校生には「大学」と尋ねた)
		変化	今年も上記と同様に変換したうえで、今年回答から前年回答を減算した。
	「入るのが難しいと言われる高校／大学に入りたい」	初期値	前年の「入るのが難しいと言われる高校／大学に入りたい」について、「とてもあてはまる」=4、「まああてはまる」=3、「あまりあてはまらない」=2、「まったくあてはまらない」=1とした。(中学生には「高校」、高校生には「大学」と尋ねた)
		変化	今年も上記と同様に変換したうえで、今年回答から前年回答を減算した。
「将来の目標がはっきりしている」	初期値	前年の「将来の目標がはっきりしている」について、「とてもあてはまる」=4、「まああてはまる」=3、「あまりあてはまらない」=2、「まったくあてはまらない」=1とした。	
	変化	今年も上記と同様に変換したうえで、今年回答から前年回答を減算した。	

※ 国私立学校ダミーと母親教育年数・父親教育年数のみ、親回答に基づく。それ以外は、原則として本人回答に基づく。

表 4 独立変数の記述統計量

		有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差		
属性	女子ダミー	中1→中2	2116	0	1	0.520	0.500	
		中2→中3	2214	0	1	0.510	0.500	
		高1→高2	1946	0	1	0.510	0.500	
		高2→高3	1901	0	1	0.510	0.500	
	国私立学校ダミー	中1→中2	2094	0	1	0.120	0.324	
		中2→中3	2197	0	1	0.120	0.326	
		高1→高2	1937	0	1	0.330	0.470	
		高2→高3	1895	0	1	0.350	0.478	
	成績	中1→中2	2080	1	5	3.533	1.078	
		中2→中3	2188	1	5	3.492	1.097	
		高1→高2	1865	1	5	3.215	0.978	
		高2→高3	1780	1	5	3.251	0.992	
	母親教育年数	中1→中2	2116	9	18	14.011	1.476	
		中2→中3	2214	9	18	13.976	1.478	
		高1→高2	1946	9	18	13.943	1.492	
		高2→高3	1901	9	18	13.922	1.485	
父親教育年数	中1→中2	2116	9	18	14.538	1.939		
	中2→中3	2214	9	18	14.587	1.927		
	高1→高2	1946	9	18	14.489	1.922		
	高2→高3	1901	9	18	14.449	1.918		
学校 適応	「授業が楽しい」	初期値	中1→中2	2099	1	4	2.980	0.790
			中2→中3	2192	1	4	2.760	0.825
			高1→高2	1935	1	4	2.710	0.794
			高2→高3	1889	1	4	2.600	0.795
		変化	中1→中2	2075	-3	3	-0.160	0.824
			中2→中3	2165	-3	3	0.020	0.821
			高1→高2	1926	-3	3	-0.100	0.816
			高2→高3	1878	-3	3	0.040	0.804
	「尊敬できる先生がいる」	初期値	中1→中2	2099	1	4	2.810	0.912
			中2→中3	2189	1	4	2.700	0.954
			高1→高2	1933	1	4	2.640	0.914
			高2→高3	1886	1	4	2.730	0.915
		変化	中1→中2	2074	-3	3	-0.050	1.018
			中2→中3	2162	-3	3	0.080	0.984
			高1→高2	1922	-3	3	0.090	0.963
			高2→高3	1875	-3	3	0.110	0.906
「自分のクラスが好きだ」	初期値	中1→中2	2096	1	4	3.200	0.813	
		中2→中3	2192	1	4	3.060	0.867	
		高1→高2	1936	1	4	3.180	0.803	
		高2→高3	1889	1	4	3.070	0.821	
	変化	中1→中2	2071	-3	3	-0.110	0.927	
		中2→中3	2165	-3	3	0.040	0.933	
		高1→高2	1927	-3	3	-0.160	0.875	
		高2→高3	1877	-3	3	-0.040	0.876	

表 4 独立変数の記述統計量（続き）

将来 展望	四大以上希望ダミー	初期値	中1→中2	2089	0	1	0.580	0.494
			中2→中3	2194	0	1	0.590	0.492
			高1→高2	1928	0	1	0.710	0.453
			高2→高3	1887	0	1	0.760	0.424
	四大以上希望に変化ダミー	変化	中1→中2	2058	0	1	0.120	0.328
			中2→中3	2170	0	1	0.140	0.349
			高1→高2	1918	0	1	0.080	0.269
			高2→高3	1870	0	1	0.060	0.230
	四大以上非希望に変化ダミー	変化	中1→中2	2058	0	1	0.110	0.317
			中2→中3	2170	0	1	0.080	0.278
			高1→高2	1918	0	1	0.050	0.220
			高2→高3	1870	0	1	0.050	0.213
	「入るのが難しいと言われる高校／大学に入りたい」	初期値	中1→中2	2085	1	4	2.610	1.057
			中2→中3	2197	1	4	2.510	1.023
			高1→高2	1925	1	4	2.460	1.050
			高2→高3	1890	1	4	2.510	1.055
		変化	中1→中2	2060	-3	3	-0.130	1.102
			中2→中3	2167	-3	3	-0.020	1.036
			高1→高2	1911	-3	3	0.020	0.891
			高2→高3	1873	-3	3	0.090	0.945
「将来の目標がはっきりしている」	初期値	中1→中2	2093	1	4	2.580	1.023	
		中2→中3	2200	1	4	2.430	1.006	
		高1→高2	1925	1	4	2.500	0.973	
		高2→高3	1889	1	4	2.550	0.957	
	変化	中1→中2	2069	-3	3	-0.130	1.015	
		中2→中3	2174	-3	3	0.000	1.006	
		高1→高2	1911	-3	3	0.030	0.958	
		高2→高3	1871	-3	3	0.200	0.919	

4. 分析結果

本節では、「勉強が好き」の変化を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った結果を示す。なお、初期値モデルと連動モデルの比較を行うため、リストワイズによって、両分析の対象者をそろえている。

(1) 勉強が「好きではない」グループのロジスティック回帰分析

まず、前年において勉強が「好きではない」グループでロジスティック回帰分析を行い、学校適応と将来展望が、勉強が「好き」への変化に与える影響を検討する。表5-1が初期値モデル、表5-2が連動モデルである。回帰係数が正の値であるとき、その独立変数の値が大きいほど、勉強が「好き」に変化しやすいことを表す。

初期値モデルをみると、学校適応に関しては、中学生・高校生に共通して「授業が楽しい」と感じていたことが、勉強が「好き」に変化することに正の効果を持っている。将来展望に関しては、高校生では大学進学を希望していたこと、高2から高3にかけては、それに加えて「入るのが難しいと言われる大学に入りたい」と思っていたことが正の効果をも

表 5-1 勉強が「好きではない」→「好き」への変化の規定要因（ロジスティック回帰分析）初期値モデル

		中1→中2			中2→中3			高1→高2			高2→高3		
		回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率
属性	女子ダミー	0.234	1.263		0.222	1.249		0.157	1.170		0.146	1.157	
	国私立学校ダミー	-0.066	0.936		0.146	1.157		-0.019	0.981		-0.241	0.785	
	成績	0.220	1.246	*	0.418	1.519	***	0.385	1.469	***	0.454	1.575	***
	母親教育年数	0.079	1.083		0.083	1.087		-0.014	0.986		-0.012	0.988	
	父親教育年数	0.032	1.033		-0.021	0.980		0.026	1.027		0.055	1.056	
学校 適応	「授業が楽しい」(初)	0.441	1.554	**	0.415	1.515	***	0.590	1.803	***	0.446	1.561	***
	「尊敬できる先生がいる」(初)	-0.159	0.853		0.122	1.130		0.015	1.015		0.019	1.019	
	「自分のクラスが好きだ」(初)	0.007	1.007		-0.010	0.990		-0.161	0.852		0.044	1.045	
将来 展望	四大以上希望ダミー(初)	0.343	1.409		0.225	1.252		0.903	2.468	***	0.562	1.755	*
	「入るのが難しいと言われる 高校／大学に入りたい」(初)	0.195	1.216		0.134	1.144		0.114	1.121		0.233	1.263	**
	「将来の目標がはっきりしてい る」(初)	-0.005	0.995		0.072	1.074		0.076	1.079		-0.091	0.913	
(定数)	-5.670		***	-5.667		***	-5.328		***	-5.369		***	
-2対数尤度		680.0			1072.8			833.4			980.1		
Nagelkerke擬似決定係数		0.078			0.126			0.115			0.128		
有効度数		879			1135			1057			1031		

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

表 5-2 勉強が「好きではない」→「好き」への変化の規定要因（ロジスティック回帰分析）連動モデル

		中1→中2			中2→中3			高1→高2			高2→高3		
		回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率
属性	女子ダミー	0.126	1.134		0.231	1.260		0.025	1.025		0.020	1.020	
	国私立学校ダミー	0.317	1.372		0.320	1.378		0.122	1.129		-0.174	0.840	
	成績	0.398	1.489	***	0.526	1.693	***	0.406	1.501	***	0.511	1.667	***
	母親教育年数	0.113	1.120		0.069	1.072		0.019	1.020		0.079	1.082	
	父親教育年数	0.033	1.033		0.008	1.008		0.073	1.076		0.087	1.091	
学校 適応	「授業が楽しい」(変)	0.612	1.844	***	0.330	1.391	***	0.222	1.248	*	0.403	1.497	***
	「尊敬できる先生がいる」(変)	0.194	1.214		-0.055	0.947		0.075	1.078		0.226	1.254	*
	「自分のクラスが好きだ」(変)	-0.027	0.974		0.023	1.023		-0.040	0.961		-0.136	0.873	
将来 展望	四大以上希望に変化ダミー	0.238	1.269		0.018	1.018		-0.684	0.505		0.124	1.132	
	四大以上非希望に変化ダミー	0.244	1.277		0.191	1.210		-0.820	0.440		-0.864	0.421	*
	「入るのが難しいと言われる 高校／大学に入りたい」(変)	0.029	1.029		0.112	1.119		0.082	1.085		0.143	1.154	
	「将来の目標がはっきりしてい る」(変)	0.277	1.319	**	0.174	1.190	*	0.097	1.102		0.169	1.185	
(定数)	-5.451		***	-4.394		***	-4.317		***	-5.362		***	
-2対数尤度		649.7			1086.1			864.8			983.7		
Nagelkerke擬似決定係数		0.136			0.109			0.066			0.123		
有効度数		879			1135			1057			1031		

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

持っている。

一方、連動モデルをみると、学校適応に関しては、中学生・高校生に共通して「授業が楽しい」と感じるようになったことが、勉強が「好き」に変化することに正の効果を持っている。また、高2から高3にかけては「尊敬できる先生がいる」ようになったことが正の効果を持っている。将来展望に関しては、中学生では「将来の目標がはっきりしている」ようになったことが正の効果、高2から高3にかけては大学進学を希望しないようになったことが負の効果を持っている。

なお、以上で述べるところの「効果」は、必ずしも一方通行の因果関係を示すものではない。たとえば、「授業が楽しい」の変化と「勉強が好き」の変化は、どちらか一方が常に原因で、どちらか一方が常に結果というよりも、互いが原因となり結果となり、まさに「連動」して変化していると解釈するほうが妥当だろう。

(2) 勉強が「好き」グループのロジスティック回帰分析

次に、前年において勉強が「好き」グループでロジスティック回帰分析を行い、学校適応と将来展望が、勉強が「好きではない」への変化に与える影響を検討する。表6-1が初期値モデル、表6-2が連動モデルである。回帰係数が負の値であるとき、その独立変数の値が大きいくほど、勉強が「好き」を維持しやすいことを表す。

表 6-1 勉強が「好き」→「好きではない」への変化の規定要因（ロジスティック回帰分析）初期値モデル

		中1→中2			中2→中3			高1→高2			高2→高3		
		回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
属性	女子ダミー	-0.167	0.846		-0.148	0.862		-0.315	0.730		-0.584	0.558	**
	国私立学校ダミー	-0.099	0.906		-0.193	0.824		-0.057	0.945		-0.093	0.911	
	成績	-0.389	0.678	***	-0.582	0.559	***	-0.258	0.772	**	-0.329	0.719	**
	母親教育年数	0.025	1.025		-0.052	0.949		-0.003	0.997		-0.037	0.964	
	父親教育年数	-0.065	0.937		0.024	1.024		-0.042	0.959		-0.027	0.973	
学校適応	「授業が楽しい」(初)	-0.118	0.889		-0.283	0.753		-0.400	0.670	*	-0.298	0.743	
	「尊敬できる先生がいる」(初)	0.080	1.083		-0.219	0.803	*	-0.204	0.815		-0.099	0.906	
	「自分のクラスが好きだ」(初)	-0.251	0.778	*	0.063	1.065		0.247	1.280		-0.031	0.969	
将来展望	四大以上希望ダミー(初)	-0.153	0.858		-0.306	0.736		-0.306	0.736		-0.241	0.786	
	「入るのが難しいと言われる高校/大学に入りたい」(初)	-0.108	0.897		-0.116	0.891		-0.243	0.784	*	-0.353	0.703	**
	「将来の目標がはっきりしている」(初)	-0.134	0.874		-0.152	0.859		-0.135	0.873		0.029	1.030	
(定数)		3.329		***	4.116		***	3.251		**	3.555		**
-2対数尤度		1211.6			948.2			826.3			638.5		
Nagelkerke擬似決定係数		0.080			0.136			0.109			0.100		
有効度数		989			856			712			649		

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

表 6-2 勉強が「好き」→「好きではない」への変化の規定要因（ロジスティック回帰分析）連動モデル

		中1→中2			中2→中3			高1→高2			高2→高3		
		回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率	回帰 係数	オッズ 比	有意 確率
属性	女子ダミー	-0.119	0.887		-0.149	0.862		-0.252	0.777		-0.376	0.686	
	国私立学校ダミー	-0.183	0.833		-0.360	0.698		-0.107	0.899		-0.251	0.778	
	成績	-0.446	0.640	***	-0.674	0.510	***	-0.341	0.711	***	-0.454	0.635	***
	母親教育年数	0.013	1.013		-0.032	0.968		-0.077	0.926		-0.089	0.915	
	父親教育年数	-0.054	0.947		-0.011	0.989		-0.073	0.929		-0.016	0.984	
学校 適応	「授業が楽しい」(変)	-0.698	0.498	***	-0.476	0.621	***	-0.473	0.623	***	-0.392	0.676	**
	「尊敬できる先生がいる」(変)	-0.134	0.874		0.030	1.030		0.117	1.124		0.011	1.011	
	「自分のクラスが好きだ」(変)	0.144	1.155		-0.104	0.901		-0.278	0.757	**	-0.226	0.798	
将来 展望	四大以上希望に変化ダミー	0.023	1.023		0.109	1.115		0.386	1.471		-1.837	0.159	
	四大以上非希望に変化ダミー	0.159	1.173		0.210	1.234		0.639	1.895		0.902	2.463	
	「入るのが難しいと言われる 高校/大学に入りたい」(変)	-0.132	0.876	*	-0.031	0.969		-0.373	0.688	***	-0.048	0.953	
	「将来の目標がはっきりしてい る」(変)	-0.114	0.893		-0.073	0.930		-0.154	0.858		-0.181	0.834	
(定数)		1.500			2.401		**	2.482		**	2.072		
-2対数尤度		1162.1			947.8			807.4			633.2		
Nagelkerke擬似決定係数		0.143			0.137			0.143			0.111		
有効度数		989			856			712			649		

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

初期値モデルをみると、学校適応に関しては、中1から中2にかけては「自分のクラスが好きだ」と感じていたことが、中2から中3にかけては「尊敬できる先生がいる」と感じていたことが、高1から高2にかけては「授業が楽しい」と感じていたことが、勉強が「好き」を維持する効果を持っている。将来展望に関しては、高校生で「入るのが難しいと言われる大学に入りたい」と思っていたことが、同様の効果を持っている。

一方、連動モデルをみると、学校適応に関しては、中学生・高校生に共通して「授業が楽しい」と感じるようになったことが、勉強が「好き」を維持する効果を持っている。また、高1から高2にかけては「自分のクラスが好きだ」と感じるようになったことが、同様の効果を持っている。将来展望に関しては、中1から中2にかけては「入るのが難しいと言われる高校に入りたい」と思うようになったことが、高1から高2にかけては「入るのが難しいと言われる大学に入りたい」と思うようになったことが、同様の効果を持っている。

なお、(1)と同様、以上で述べるところの「効果」は、必ずしも一方通行の因果関係を示すものではない。子どもたちの1年間の変化を想像したとき、学校適応・将来展望のうちのいくつかの要素と勉強好きは、互いに原因となり結果となり、スパイラルに変化していると解釈するほうが適切だろう。

(3) ロジスティック回帰分析に関する小括

以上の分析結果を総括すると、初期値モデルと連動モデルで、効果が認められる独立変数が異なることが確認できる。つまり、勉強好きの変化は、学校適応や将来展望の初期値で決まる部分と、連動して変化する部分がある。また、モデル適合度を表す-2対数尤度と擬似決定係数に着目すると、初期値モデルと連動モデルでどちらが大きいとは一概には言

えず、どちらかのモデルが採択されるというよりも、2つの側面を持っていると解釈できる。ただし、中1から中2にかけては、初期値モデルよりも連動モデルのほうが、適合度が高い傾向がある。すなわち、中学校生活の前半においては、勉強好きは学校適応や将来展望とともに流動的に変化する部分が相対的に大きいと考えられる。

次に、「好きではない→好き」と「好き→好きではない」の分析結果を比較すると、両者の変化に共通する要因としては、「授業の楽しさ」の変化があり、子どもたちの学習において重要な要素であることがわかる。一方で、「好きではない→好き」と「好き→好きではない」の変化で異なる要因としては、中学生で将来の目標が明確になったこと、高校生で大学進学を希望していたことなどが挙げられる。これらは、勉強が「好きではない」から「好き」に変化させる効果は見いだされたが、「好き」を維持させる効果は見いだされなかった。将来を意識させることは重要であるが、それによって勉強が好きになった後に、勉強好きを維持させるには、また別の方法が求められるということだろう。

5. まとめと考察

以上の分析から得られた知見およびインプリケーションは3つである。

第1に、どの学年でも、勉強が「好き」から「好きではない」に変化する子どもが一定数おり、勉強が「好き」をキープする子どもは、特に高校生では少なくなる。ただし、どの学年でも、勉強が「好きではない」から「好き」に変化する子どもも一定数いる。つまり、勉強好きはある程度変化するものと捉え、その変化の要因に働きかけることが重要と考えられる。

第2に、勉強好きの変化は、学校適応や将来展望に関する変数の初期値で決まる部分と、連動して変化する部分がある。つまり、初期状態の意識が重要であると同時に、初期に課題を抱えていたとしても、在学中に学校適応や将来展望を変化させることによって勉強好きを変化させられる可能性がある。生徒の初期状態と在学中の変化のどちらか一方だけを強調する議論には、再考の余地がある。

第3に、勉強好きの変化には、学校適応と将来展望の両方の要素が独自の効果を持っており、それぞれを高めるような働きかけが重要となる。また、学年にかかわらず効果を持つものもあれば、学年によって効果が異なるものもあり、それをふまえることが必要である。学年によって異なるものは、その時期ごとの働きかけが重要になる。

本研究の限界は、独立変数に用いた項目が、勉強好きの変化の規定要因の一部を捉えたものにすぎないという点である。たとえば、「学校の勉強は日常生活で役立っている」という意識は、現在のレリバンスひいては学校適応に関するものとして、「学校の勉強は将来の仕事で役立つ」という意識は、将来的レリバンスひいては将来展望に関するものとして、分析に追加する必要があるだろう。今後、より多面的な分析が求められる。

<注>

- (1) 国際学力調査TIMSS2015によると、小学4年生で「算数の勉強が楽しい」と回答した児童は74.9%、中学2年生で「数学の勉強が楽しい」と回答した生徒は52.3%である。質問文はやや異なるものの、国際学力調査PISA2012によると、高校1年生で「数学で学ぶ内容は興味がある」と回答した生徒は37.8%である。これらの傾向は理科／科学についてもみられる。
- (2) ベネッセコーポレーションが保有している各学年の親子リストから、地域ブロック（北海道・東北、東京都以外の関東、東京都、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄の7地域）の人数比が文部科学省「学校基本調査」における同比率に合うように、また、進研ゼミの会員・非会員の人数比が親子リスト全体における同比率に合うように、モニターを募集した（ベネッセ教育総合研究所2016、2017、2018）。

<参考文献>

- 荒牧草平, 2002, 「現代高校生の学習意欲と進路希望の形成 — 出身階層と価値志向の効果に注目して」『教育社会学研究』第71集, pp.5-23.
- 伊藤崇達編, 2010, 『改訂版 やる気を育む心理学』北樹出版。
- 伊藤崇達, 2011, 「親の自律的動機づけと子どもの学習観、自己効力感、自律的動機づけとの関連」『京都教育大学紀要』No.118, pp.9-16.
- 岡田涼・中谷素之, 2006, 「動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響」『教育心理学研究』第54巻, pp.1-11.
- 鹿毛雅治, 2013, 『学習意欲の理論 — 動機づけの教育心理学』金子書房。
- 荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機 — 不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。
- 櫻井茂男, 2009, 『自ら学ぶ意欲の心理学 — キャリア発達の視点を加えて』有斐閣。
- 速水敏彦, 1998, 『自己形成の心理 — 自律的動機づけ』金子書房。
- ベネッセ教育総合研究所, 2016, 「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」(<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=4848>)。
- ベネッセ教育総合研究所, 2017, 「子どもの生活と学びに関する親子調査2016」(<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=5095>)。
- ベネッセ教育総合研究所, 2018, 「子どもの生活と学びに関する親子調査2017」(<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=5279>)。
- 本田由紀, 2004, 「学ぶことの意味 — 『学習レリバンス』構造のジェンダー差異」荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学 — 調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店, pp.77-98.

<謝辞>

「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2017」(JLSCP2015-2017)は、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学び」研究プロジェクトが実施した調査です。データの使用にあたっては、同プロジェクトの許可を得ました。プロジェクト代表者である石田浩先生（東京大学）、プロジェクトメンバーである耳塚寛明先生（お茶の水女子大学）、秋田喜代美先生（東京大学）、松下佳代先生（京都大学）、佐藤香先生（東京大学）、藤原翔先生（東京大学）をはじめ、関係各位に御礼を申し上げます。